

極楽坂の鬼 (一) 鬼に金棒

野見山悠紀彦

極楽坂の鬼は今宵も盃を手にしていた。この鬼、上品な事に酒を朱盃に移してから飲む。間違っても、湯呑に注いで飲むような真似はしない。炉の前で胡坐あぐらをかき、悠然と一人で酒を酌んでいた。

自在に掛かる鉄鍋には猪肉が多量に入れられ、灰汁が泡を吹き立てている。泡の間に浮ぶ灰色の塊は、猪の肺臓であろうか。鬼は杓子で掬い取った肉を、実に旨そうに噛み締めた。この鬼、一見粗雑に見えるのだが、一人暮らしの割に辺りは整然と片付けられている。

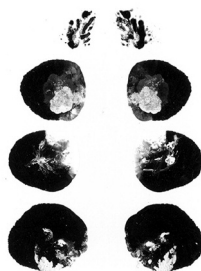
普段は寡黙にならざるを得ない暮らし振りであるが、世間が思う程付き合ひの悪い男ではなかった。鬼と噂されるこの男の棲家は、極楽坂を半町下った坂の途中にある。辺りの家々と違い、この棲家だけは茅葺であった。通りに面して土塀はなく、生垣のみの無防備な造りとなっていた。

この事はこの男の指図に依った。何よりも邸内に留まる事を嫌い、気分として開放される事を望んだ。よって日中は、表の冠木門かぶきもんは開け放たれていたのである。かと申して、誰もが気楽に訪れた訳でもない。それは鬼と噂された事により、尚更人々に警戒された。

生垣は外から覗けた。覗いた子供達から噂が広がり、いつしか大人の間でも「極楽坂の鬼」と囁かれるようになったのである。

子供達が眼にした光景は、血の滴る獣を松の枝にぶら下げ、皮を裂き、肉を切り取る鬼の姿であった。子供達は大仰に親に語り、ご用聞きの人骨付きの肉塊を目にして、あの男は血の滴る生肉を喰らっていると言い触らした。本人は鬼と呼ばれている事も知らず、平然と暮らしていた。

この一人暮らしの初老の男は、人相が悪いとか身なりが



卑しいと言う訳ではない。顔つきは至つて柔和であつたが、目の輝きに一樣ならざる鋭さが見え隠れしていた。また、堂々たる五尺七寸の体軀は、他を圧倒していた。その実、この男の裸を眼にした者があるとすれば、刻まれた無数の刀傷に驚嘆すると共に、鬼の生まれ替りと信じたかも知れない。

この男は月に一度、竹棹問屋から青竹の束を届けさせていた。近所の住人は、青竹を積んだ荷車が長い坂をゆつくり上るのを何度も眼にしている。鬼の注文する青竹には条件が付けられ、太さ四寸以上で更に三年以上を経た品物でなければならなかつた。

この荷が到着すると間も無く、あの奇声とも言うべき、甲高く鋭い気合いが辺りに鳴り響いた。子供達や通り縫りの者が、怖いもの見たさに生垣に首を突っ込んだ。初老の男は諸肌を脱ぎ、差し渡した青竹の前で木太刀を構えている。木太刀と言つても並の物ではない。優に五尺以上もあり、その太さも尋常でなかつた。

その隆と盛り上がった胸と腕の肉は、とても五十に近い男のものではなかつた。鋭く奇声を発するや、一筋に上段から振り下ろす。四、五寸もある青竹は千切れこそしないが、無残にも折られてしまう。時には木太刀の方が折れ、空高く舞い飛んで行つた。一見、薩摩示現流のようにも思

えるのだが、この男の自己流であつた。

一束の竹を割り終わると、鬼は真剣を手にした。またしても、この刀が長大であつた。刃渡り二尺八寸の、豪刀とも言うべきものである。気合いもろとも振り下ろされた刀は、太丸竹を真二つに断ち斬つた。試し切りの重ね胴ならば、三つ胴に達したであらう。

三丁以上もある緩やかなこの坂は南へ真直ぐに下り、川を越えて市街地へ通じていた。坂下には蓮池が連なり、夏には見事な華が水面を飾つた。蓮の華が咲き誇り極楽のようであるからと、この坂は極楽坂と呼ばれていた。坂を上つて来る人々は、当に極楽浄土へ達する思いがしたのである。季節には市中より大勢の見物客が押し寄せ、坂下の土手には多くの掛け茶屋が出現していた。

然し、この極楽坂は、今や人斬り坂と囁かれている。半年前、先ず侍一人が斬り殺され、続いて花見帰りの町人がこの坂で斬り殺された。それから二月後には僧侶が同じ目に遭つた。何度も斬り重ねられており、明らかに刀の試し切りであると断定された。

下手人は間も無く判明した。判明はしたが、下手人と思われる三人の武士は命を絶たれて発見された。皆一太刀で倒されており、骨までも断ち斬られていた。余程の剛腕で

あろうと噂になっていた。

死骸の懐に半紙が差し込んであり、襲われたゆえ返り討ちにしたと書き残されていた。斬り殺された三人は黒装束で身を固め、身元を示す手掛かりは何ひとつなかった。当然のように、身元を確かめに訪れる家中も皆無であった。

遺骸の首は鈴ヶ森に晒され、遺体はその場に打ち捨てられた。一体誰の仕業なのかと江戸中の話題をさらった。斬り殺された場所が極楽坂であり、坂に暮らすあの鬼が手を下したのだと、尤もらしい噂が流れた。近所に暮らす者も、さもありなんと思つた。

この鬼は市街地には滅多に足を運ばない。決まつて月の内の十日程は屋敷を留守にする。この鬼の居ぬ間を、心より待ち望んでいる者達がいた。

鬼の出入と入れ替りに、武家の娘と従僕がこの鬼の棲家に姿を現した。どうやら留守番に来るらしいと、様々の憶測を呼んだ。それは何よりも、この娘が絶世の美女であつた事による。そしてあの鬼は一体何者なのかと、一層不思議がられた。

噂の美女は明らかに武家の娘なのだが、誰もその出自を知らない。坂の上の台地には、旗本や大名家の屋敷が多く、若侍達の噂の種になっていた。

「あの鬼の娘なのであろうか？」

「いや、あまりにも似ておらぬ。親戚筋の者であらうか？」

「それにしてもあれ程の美女、噂にならぬ筈がない。余程大身の奥育ちであらうか？」

「お主、耳にした事はないのか？」

彼等の話は尽きる事がない。用もなさそうな非番の侍が、散歩を装つて坂を上り下りする姿が目についた。あわよくば、一目その姿を拝みたいとの思いからであつた。

若侍二人が、人通りの絶えた間隙を縫つて生垣の内を覗き込んだ。娘が庭を掃く姿に気を取られていた。すると背後からいきなり、

「お主達、何を為されておる？」

と、柔かく声を掛けられた。我に振り返り向いたそこには、あの鬼が仁王立ちに二人を見下ろしていた。然し、その顔に厳しさはなく、微かに微笑んでいる。

「いや、怪しい者ではござりませぬ。我が主人の猫がお庭に逃げ込み、粗相を致さぬかと思ひ……」

あらかじめ考えておいた言い訳を口にした。

「左様か、されどご心配は無用。当家は猫好きの者ばかりでな、一向に構い申さぬ」

「さ、左様でございますか。我等も安心致しました。その内戻つて参りましょう。それではこれにてご免蒙ります」
急ぎ去り掛けた二人の背後に鬼が投げ掛けたひと言は、

彼らの肝を凍らせた。背筋に刃を差し込まれた思いがした。

「流星にわしも、猫を食する気にはなれん」

坂上に走り去る彼等を見送る鬼は、相好を崩していた。

彼等が鬼を見て驚き威圧されたのは、意表を突かれたからだけではない。鬼は何と、猪一頭を両肩に担いでいたのである。

表の騒ぎに気付き、娘が急ぎ駆けつけて門の扉を開いた。

「叔父様、お帰りなさいませ」

さらさらと瞳を輝かせ、清々しい面差しで鬼を出迎えた。

「咲殿、いつも手間を取らせて済まぬ。今度は少し早目に立ち戻った。何しろこの獲物が傷みはせぬかと心配でならぬ」

本気なのか冗談なのか、声をあげて笑っている。

「大層な獲物でございますね。ご自身でお止めを？」

「左様、木太刀の一撃で仕止めた。内臓は抜いてある。

今宵辺りが食べ頃であろう。咲殿に馳走申し上げよう」

鬼は満面の笑みを浮かべていた。

「折角のお申し出なれど、咲はご遠慮申し上げます」

毎度交わされる同じ遣り取りを、咲も楽しんでいた。

「そうか、そうであったな。咲殿は良家の子女であったな。わしのような無骨者ではなかつたな」

獲物を提げて帰る度に、同じ会話が交わされた。

然し、今日は聊か長引いた。

「近頃は盛りの付いた猫がうろついて困る」

「ねこ？ 猫でございますか？」

「左様、季節外れの牡猫が当家の回りを嗅ぎ回っておる。何しろ当家には世にも稀なる雌猫がおられる」

利発な姪は直ぐに察した。恥じらいを見せながらも、

「いつもご冗談が過ぎます！ 臭うてなりませぬ故、背の物を早ようお片付けなさいまし」

咲は態と鼻を摘まんでみせた。

いやあ、済まぬ済まぬと獲物を肩から下ろし、咲の前へ突き出したのである。

悲鳴を上げて走り去る姪の後ろ姿を、鬼は眩しく眺めていた。

着替えもせず、従僕の利平を介添えに獲物を捌き始めた。親子二代に亘り青山本家の従僕を勤める利平も、当初は逃げ回っていた。鬼がどのようにして説き伏せたのかは判らない。今は進んで手伝い、精がつくと喜んでその肉を口にしていた。流星に咲は生臭い生臭いと、近寄るのを避けたのだが。

大半の肉を塩漬けし、今宵の鍋の肉を整えると鬼は湯殿へ向かった。溜まった垢を念入りにこそぎ落とし、ざんば

ら髪の頭に湯を豪快に被る。肩と言わず、胸、腹、腕に残る刀傷を目にすれば、当に鬼の湯浴みであった。

湯から上がり炉の前に座すと、待ち構えていた咲が髪を整えた。月代はこの棲家に移る折に止めていた。髪を後ろで束ねるだけであった。櫛で整え、元結を施して終わりである。鬼は実に気持ち良さそうに目を閉じ、されるが儘に任せていた。

鬼の姪に当たる咲は、すでに二十の半ばを過ぎ、兄青山主水を悩ませていた。咲と主水の叔父に当たる鬼は五十に近い。普段、咲は当主の兄夫婦と暮らし、その子供等の養育に務めていた。

青山主水は旗本三千石の当主であったが、咲は四歳、主水は十歳の時までに両親を失っていた。跡を継いだ青山主水は叔父の後見人として成長し、叔父はその婚姻と嫡子の出産を見て別邸に移り住んだ。それが鬼の正体であった。鬼と呼ばれる男の名は、青山伊織と言う。

兄の急死により部屋住みの身に転機が訪れた。親戚の内では伊織を当主にとの話もあったが、本人が固辞した。堅苦しい侍の暮らしを、聊かも望まなかった。遺児の親代りとなり、責任持って養育すると親戚一同に誓約した。

二十代半ばでの覚悟であった。それまでは剣術修行と称

して、関八州を飛び回っていた。全身の傷はその当時の痕跡であったのだ。

主水、咲の兄弟が成長した今でも、二人は叔父の伊織を実の父のように慕っていたのである。赤坂の屋敷で共に暮らして欲しいとの願いを断って、この極楽坂に棲家を移したのは二年前であった。

十代半ばからの十年、部屋住みの気楽さもあり、あちらこちらの道場を渡り歩いた。剣術修行が目的であったが、若さに任せて一人身を存分に謳歌した。大身の旗本である事が幸いし、どの道場でも入門を断れない。三月、半年と流儀に構わず門を叩いた。

然し、剣術は自己流を押し通した。打ち込まれる事を覚悟で、上段から一気に打ち下ろす迫力に門弟達は慄き、やがて疎まれて道場を移らねばならなかった。どの流儀にもそれらしき講釈はあったが、何れも実戦には耐えられないとの思いを強く抱いた。

それでも気さくで駘蕩とした人柄によって、気脈の通じた友人知人を多く得た。武家は勿論、百姓、獵師、商人と、その身分も様々であった。

甥、姪の後見役としての二十年経て、隠居とも言える身分となり、また旅を始めた。それは旧交を温め、曾遊の地に遊ぶ為であった。道場を訪ねるでもなく、劍客相手に試

合を挑む旅でもなかった。

知人を訪ねては盃を交わし、昔日の失敗を語り合った。時には獵をする事もあり、その獲物である鳥獣を土産として持ち帰り、いつも咲の鬘おんしやくを買っていた。

但し、全てが穏やかで旧交を温める日々ではなかった。訪ね行く先々で、世間の騒動に巻き込まれた事も多々あった。あるいは知人友人の抱える悩みにも、見込まれて手を貸す仕業となった。

三人の辻斬りが極楽坂で斬り殺された一件も、そんな関わりの中の一つであった。

相談を持ち掛けたのは旧知の小柳熊之介であった。当時熊之介は、下総鹿取藩で五百石を取る重臣の嫡子であった。伊織と知遇を得たのは二十歳の頃である。背丈は伊織の肩までしかなく、生真面目で大人しい男であった。城下の一刀流の道場で知り合い、熊之介の方から伊織に近付いて来た。身体の大きさに頼るところもあったが、何よりも自分にはない大らかさに魅かれた。

それまでに遊んだ事もなく、伊織に連れられて町人世界で遊びを覚えた。人が変わったように明るくなり、両親は却ってその事を心配した。伊織が当地を去ると聞いた時は、涙まで流して引き止めた男であった。

その熊之介が要と名を改め、今は鹿取藩上屋敷の側用人を勤めていたのである。書状が伊織の元に届けられたのは、侍・町人・僧侶の三人が辻斬りに殺されてから、左程に日数を経ていなかった。

桜田の鹿取藩上屋敷から一挺の駕籠が、夕暮れに紛れて門を出た。伊織も珍しく網代笠を被って屋敷を後にした。坂を上るとそのまま北へ向かい、半刻後には東に道を探っていた。緩やかな坂を下り、芝に向かっていたのである。指定された料理屋には、既に小柳要が到着して伊織を待ち受けていた。小柳と逢うのが、二十年振りと言う訳ではなかった。小柳が江戸詰めとなつてから、幾度となく旧交を温めている。

挨拶もそこそこに、盃を一度交わしただけで二人は密談に入った。側用人が切り出した要件は容易ならざるものであった。声を落として語る側用人の話を、伊織は瞑目して聞いていた。話し終わった小柳は座を引き、深々と低頭した。

「委細承知致した。一任願いたい。ご当家に類の及ぶ事、決してこれなきよう計らい申す」

「真に身勝手な願いをお聞き届け下され、藩主に代わり御礼を申し上げる」

側用人小柳の話は藩の命運に関わるものであったが、それよりも小柳は人の道に悖る事を強く言った。もし藩の存続だけを願つての事であれば、伊織は即座に断つたであらう。

小柳要の切なさは外にもあった。往時の小柳熊之介はその後十年に亘り、藩主の兄の宗明の近従を勤めた。身近に仕え成長を見守つて来た者にとつて、その当人の殺害を依頼する事は甚だ忍び難いものであったのだ。

当時宗明は、当然の如く藩主の座に就くものと考えられていた。然し元服前に突然廃嫡され、三歳下の宗俊が嗣子とされた。宗俊は宗明の後から生まれたが正室の子であり、その事が理由とされたのである。生母である側室お小夜の方と宗明の心中はいかばかりかと、事の理不尽さを思い共に涙した経緯があった。

兄宗明と弟宗俊の確執はこの時から始まり、爾来藩政の陰日向に両派の輜当が見え隠れしていた。この度の騒動は内に溜まった怨念が一挙に噴き出したのではないかと、気苦労の絶えない側用人は、今の職務を恨むが如く呟いたのである。

自らの手で殺害する事も考えたが、秘密が洩れて騒ぎが大きくなる事を恐れた。藩とは無縁の青山伊織を頼り、緘る思いで両手を合わせていたのである。

そもそも藩の内紛は一年半前の端午の節句より始まった。藩主宗俊の嫡子、五歳の千代丸君が毒殺された事件が発端であった。節句祝に贈られた菓子を口にし、千代丸君は間もなく死亡した。

菓子の贈り主は、先代藩主の側室お小夜の方であった。宗明の母であるお小夜の方は剃髪し、現在は国許の林泉院の庵主である。きついお調べがあったが、庵主は贈つた憶えがないと身の潔白を主張した。

いつ誰によつて届けられたか、かつてない厳しい詮索がなされた。だがそれも全く要領を得なかつた。諸方より贈られた品物は逐一書き留められていたが、その菓子箱には庵主の名が記載されていただけで、控えの台帳にも記入されていなかった。

何者かが殺害の意図を持って、密かに紛れ込ませたと思えた。誰よりもその動機を疑われるのは林泉院であり、当人がわざわざ名乗つて毒菓子を贈る訳がないと審判が下され、有耶無耶の内に収められた。

然し、事件はそれで終わらなかつたのである。その年の夏の終わり、今度は宗明の奥方であるよしの殿が不審な死を遂げた。毒殺と囁かれたが、藩主は騒ぎの広がるのを恐れて強引に封印した。

この処置に宗明の怒りが頂点に達した。二人の確執は急速に高まり、互いに身辺の警戒を強めた。藩主宗俊は小柳に命じ、宗明の身辺を探る為に密偵を下屋敷に入れていた。この密偵が辻斬りを装って殺された。その場所が偶然にも鬼の暮らす極楽坂であったのだ。

鹿取藩下屋敷は、坂上の台地を北へ僅か三丁の所にあつた。藩主宗俊に対する、これ見よがしの所業であつた。だが宗明は辻斬りの味を覚えたのか、日頃の鬱憤を晴らす為か、二度三度と辻斬りを重ねた。町人・僧侶の殺害も、宗明と近従二人の仕業であつた。

この内情を側用人に伝えたのは、下屋敷の下僕八助であつた。送り込んだ密偵とは別に、側用人は八助に言い含めていたのである。

これを聞いた藩主は怒り、その場で宗明切腹の断を下した。ところがこの命に対し、とんでもない返答が返つて来た。

「如何にも拙者は辻斬りを致した。然しながら切腹致す所存これなく、強いてと仰せなら自ら大目付に申し出で、その処分に従うまでの事……」

正面から挑戦状を叩きつけられたも同然であつた。もしそのような事態となれば、藩は改易を免れない。藩主の怒りはぐつと喉元で押し潰され、その矛先は側用人へ向かつ

た。

「どんな手を使おうと構わぬ！ 宗明を密かに始末せよ！」

側用人は窮した。秘密裏に事を運ぶには、藩士を動かす訳に行かない。側用人の脳裏に浮かんだのは、旧知の仲である青山伊織の顔であつた。藩主の一任を取り付け、芝の料理屋で伊織と逢い、その救援を求めたのである。

仲秋の名月も過ぎ、秋の気配が日に日に深まりつつあつた。青山伊織は常に変わらず木太刀を振つていた。やがて月が陰り新月の闇が迫ると、鬼に変化した伊織はゆつたりと極楽坂を下り、やがて亥の刻の鐘を合図に坂を上り始めた。何れの辻斬りも闇夜に実行されていたのである。

さも酔つた職人が極楽坂を上つて来るように、薄暗い提灯がゆらりゆらりと右左に揺れている。素足に草履、尻を端折っている。背に担いだ刀の上から半纏を羽織つていた。大きな菅笠は髪型を悟られぬ為である。

物音の絶えた極楽坂は、様々な虫の声に覆われている。天空に煌めく無数の星は今にも音を立てて崩れ、滝となつて坂を流れ下るかと思えた。その中で鬼は、虫の音が途絶えた一瞬を聴き逃さなかつた。左手前方の闇に二人、右手の闇に一人が潜んでいる。

背後から襲う算段と見抜き、彼等の潜む数間手前で態と転んだ。その時、背中の刀を脇に抱え込んでいた。鼻緒が切れた振りをし、しゃがみ込んで敵が飛び出して来るのを待った。

痺れを切らした左前方の二人が飛び出し、続いて右の一人もそれに続いた。すつくと立ち上がった鬼に、彼等は一瞬たじろいた様子を見せた。だが退くに退かれず、そのまま坂の上から斬り掛かった。坂の上から斬り掛かる事は容易でない。勢い余って坂を転がり落ちる危険がある。

左に飛んだ鬼は長刀を払い上げ一人の胴を断ち割り、二人目の脇下をも切り裂いていた。残りの一人は驚き恐れ、逃げようとして後ろを見せたところを襲われ、首の付け根を深々と斬り下げられた。何れも一太刀で命を絶たれていたのである。

鬼は用意していた懐紙を死骸の懐に差し入れ、静かに己が棲家に姿を消した。再び辺りは虫の声に満たされ、煌めく星は音も立てずに崩れ落ちた。

一件は落着いたかと思えたが、小柳要から急の呼び出しを受け、芝の料理屋で再び顔を合わせた。小柳は先般の礼を口にしながらも、奥歯に物の挟まった言い方をした。

はて、まだ残された事があったかと怪訝な顔をした伊織

に向かい、小柳は申し訳なさそうに国許行きを願ひ出た。事は終わっていないかった。

宗明の生母お小夜の方が藩主を狙い、騒動を起こす気配があると言った。宗明に仕えた六人とお小夜の方が、林泉院で密議を凝らしているらしい。その真偽を確かめ、真の事であるならことごとく討ち取って頂きたいと、苦渋に満ちた顔で頭を下げたのである。藩士を動かせば騒ぎは広がり、幕府の耳に入る事を案じていた。

鹿取藩は五万石の小藩であったが、譜代であった。松平の姓を賜っていた。霜月の碧く晴れ上がった空のもと、赤城嵐あかぎに吹かれて下総へ向かう二人の姿があった。刈田の中に青々とした冬菜が葉を広げている。伊織につき従う若者は弥一と言った。弥一は竹棹屋たけざわらの倅である。

毎月青竹を届けに来ては伊織の凄まじい剣技を目の当たりにし、教えてもらいたいと弟子入りを願ひ出た。束脩さくしゅうはいか程で宜しいかと、伊織の返答を待たずに懇願した。弟子をとる気など更々なかったが、その一途な様子に冗談の心算で青竹一束と口にしてしまった。

爾来、青竹一束を担ぎ、極楽坂を上って来ては教えを乞うた。教えると言っても、青竹を只ひたすら打ち据えるだけである。百回打ち下ろしても折れなかつた太竹が、近頃は五、六十回で折れるまでになっていた。その真剣な眼差

しに昔日の自分を重ね、好感を持って眺めていた。どうやら江戸市中から出た事がないらしく、嬉々としてついて来た。

鹿取藩城下は平地の上にある。小高い丘とも言うべき場所に三層の城郭が築かれていたが、物々しさとは無縁に思われた。堀が武家地と町人町の間に引き込まれ、穏やかな佇まいを見せていた。一見穏やかに見えるこの城下だったが、青白い火種が燻り続けていたのである。

お小夜の方が暮らす林泉院は城下の外れにあった。簡素な築地塀の内は小振りな持仏堂と庵主の住居が隣接して配置され、その割には大きな池が設けられていた。辺りの松林が松籟を奏で、至って静謐の中にあつた。

城下の目立たぬ旅籠に腰を落ち着けた伊織は、弥一に林泉院の人の出入りを見張らせた。数人の侍女と暮らしている様子で、城下の商人が時折品物を届けに訪れるだけであつた。

伊織にとって旧知の城下で懐かしくもあつたが、今はそれに浸っている余裕はない。林泉院に向いてはみたものの門は固く閉じられ、異常な様子は微塵も窺えない。

五日を過ぎ、小柳の思い過ごしであるまいかと思ひ始めた時、慌しい動きがあつたと弥一が掛け込んで来た。六つ

も近まる頃、次々に男達が門を潜つたと告げた。

何を思ったか、伊織は袴かみしもの正装に身を整え林泉院へ向つた。薄闇の中で邸内の様子を窺っていたが、何時ものような静かな佇まいを見せ、騒ぐ気配は伝わって来ない。

鬼は正面から立ち向かう事を考えていた。その為の正装であつた。憶する事なく門を叩き案内を乞うた。暫くあつて、女の声で誰すい何かされた。名は名乗らず、

「藩王宗俊殿の命を受けて参上した。庵主殿にお目通り願いたい」

と告げた。暫く間があつて、門は静かに開かれたのである。人の気配を探したが、物音一つ聞えて来ない。庵主の居室に導かれた。意外にも庵主お小夜の方は下座に回り、低頭して鬼を迎えた。五十を僅かに越したのであろう庵主は、なかなか顔を上げようとしなかった。鬼の再三の言葉に面を上げたが、女の顔は憔悴し切っていた。経緯を知るだけにその無念を思ったが、その子宗明の所業を許す訳には行かない。鬼となつた伊織は、単刀直入に事の真相を問ひ糺した。

「嫡子千代丸君を殺害したのは貴女そなたの仕業か？ また、宗明殿の死を恨み、騒動に及ぼうとしたは確かか？」

庵主の両眼から大粒の涙が溢れ出し、絶え間なくその頬を濡らした。やつれ果て哀しみに沈む母の姿は心に迫るも

のであったが、重ねて問い糺した。

「この事、間違いないか」

老女は静かに頷き、再び低頭した。

「全てはこの林泉院の謀はかりごとでございます。恐れ入りまして
ございます。ほんの少しのご猶予を……」

老女は静かに立ち上がり、隣室に姿を消した

瞑目して待つ鬼は、母の哀れを思わざるを得なかった。

自分の謀で息子を死に追いやり、挙げ句には首は晒され遺骸は打ち捨てられた。これ程酷い結末を招こうとは、思ひもしなかったであろう。

やがて香の煙が辺りに漂い、その中に微かな血の匂いを嗅ぎ取っていた。

だが、鬼はこのまま放免されなかった。門を出たところで、抜刀した男達に囲まれた。

「林泉院殿は自刃なされた。馬鹿とは申さぬが、無駄死には止めよ。今なら間に合う。この場で拙者を斬れば、お主達も藩も唯では済まぬ。それでもよろしいか？」

何れも若侍と見て穏やかに諭した心算であったが、正面の一人が問答無用と斬りかかって来た。

鬼の長刀はその刀を叩き落としていた。刀を拾おうとしたが手首が痺れて拾えない。横にいた長身の侍が正面から

突いて来た。鬼の豪刀が振り下ろされた。相手の切っ先は鬼の胸先一寸で止まっていた。無残にも頭蓋を断ち割られ、その場に崩れ落ちた。その有様を目にした侍達は後退りした。鬼が吠えた。

「眼を覚ませ！ 命は一つぞ！」

この叫びに押され、彼らは一目散に姿を消した。

この有様を松の陰から見ていた弥一は腰を抜かし、しばらく立ち上がれなかった。然し、それでも懲りずに、青竹を担ぎ極楽坂を上って来た。

三度、芝の料理屋で二人は顔を合わせていた。お蔭を以て藩は救われ、長年の遺恨が取り払われたと側用人は礼を述べた。それにも増して、林泉院親子の不憫を口にした。

此の度の尽力に対し藩主より命を受けていると側用人は語り、金銭なり何なり、望みの物を申し出て頂きたいと懇願した。藩主に伊織の名は告げられていない。側用人一人を知る立場にあった。

「断つてもらってはこちらの立場がない。困るのだ」

そう言つて伊織を説得した。もとより報酬を期待しての事ではない。偏ひとへに友の窮状を見兼ねての事であった。然し、押し切られて、ある物を所望した。

「強いてと言われるなら、刀一振りを頂戴したい」

「刀？ 刀でござるか？ それならば拙者の一存でお受け致す」

「だが……、少々望みがござる」

「遠慮は無用でござる。何なりと申されよ」

「されば、同田貫を頂戴したい」

側用人はあつと小さく声を上げた。伊織は憶えていたのである。昔日、道場帰りに二人は居酒屋に立ち寄った。剣術の話から差料の話になった。その折、小柳の口から、藩には代々伝わる同田貫があるらしいと語られた。藩祖が戦場で使ったものらしいと言った。言わば家宝とも言えるものであったのだ。

「ふう〜む、こればかりは一存で図り難い。宗俊侯に伝え、ご判断を仰がねばならぬ」

そう言つて難しい顔をした。

それから十日も経つたであろうか、陽の落ちた極楽坂を下る側用人の姿があった。小柳要は脇に刀袋を抱え、開けられていた門の内に吸い込まれた。

屋敷内には伊織一人しかいない。炉の前で対面して座り、小柳は持参した刀を伊織に差し出した。

「よろしいのでござるか？」

「いかにも。二つ返事とは行かなんだが、藩主も承知の

上でござる。藩の命脈を繋ぎ得たのも、みな青山殿のご尽力あつての事でござる。死蔵しておくだけの刀など、藩にとつてどれ程の意味がござらう。然るべき剣客のもとに納まればこそ、名刀も命を得ると存ずる」

伊織は袋より取り出した同田貫を炉の灯りにかざした。ずつしり腕に伝わる重さを確かめ、青黒く沈む地肌に見入つていた。身幅一寸三分、重ね三分を超えている。

「何よりの物を頂戴した。有り難く使わせて頂く」

同田貫に見入る伊織を眺めていた小柳は、その様子を譬えてこう言つた。

「同田貫をかざしておられる伊織殿は、正に鬼が金棒を手に行っているようござる」

「はっはっは、鬼に金棒でござるか。何やらこの辺りでは、拙者を鬼と呼んでおるそうな」

深まり行く秋の夜は冷える。炉の火を盛んにし、自在に鍋を掛けた。

「先般八王子より持ち帰つた猪肉でござる。身体が温まり申す。今宵は旧交を温め、存分に酌み交そうではござらぬか」

側用人は聊か尻込みをした。